

マネジメント理論を活用した人材・組織の競争力強化

「週刊ダイヤモンド」副編集長 大坪亮氏

数学を使って科学的な論証を重んじる経済学（社会科学の女王）に比べて、経営学の歴史は約100年に過ぎず、学問として軽く見られる傾向もあった。しかし世の中の役に立つと言う意味では、経営学・経営理論の役割は大きい。

齊藤孝氏は『古典力』（岩波新書）のなかで、古典を読むことの効用を強調している。学問においては、時間を経て生き残る真理を探究することが古典を読む意義であろう。それに対して、ビジネスに携わる人々がマネジメント理論の古典を読む意義は、マネジメント理論を日々仕事に活かすこと、学んで、考えて、使って、臨機応変に現場に活かすことである。

最も基本的なフレームワークとして、ポーターの三つのモデルがある。ポーターは企業の利益に影響を与える「市場における5つの競争要因」「バリューチェーン」、企業が取るべき三つの「戦略」と言うフレームワークを提示した。「市場における5つの競争要因」によってポーターは、初めて比較的分かりやすく、市場の構造を明らかにし、その中でいかに勝っていくのか考える方向性を示したと言える。

ポーターが外側の市場から企業の競争のあり方を考えたのに対して、RBV（Resource Based View）の理論は企業の中に競争力の源泉を見る。この考え方は、ボトムアップから戦略が生まれる日本企業の競争力に注目した研究者達によって打ち立てられた。ポーターの理論とRVBは、一見対極に見えるが、両者の理論は現実においては総合されている。ポーターのフレームワークを用いながら、様々な経営理論が展開されている。

著書『勝ち組企業のマネジメント理論』（角川SSC新書）で、講師が取り上げた経営戦略は、市場の中で勝つことを目的としている。いまや経営層だけでなく、係長、課長クラスのビジネスマンもこれらの経営理論を知り、ビジネスに活かす必要がある。

マネジメント理論と言う道具は日々現場で使うことによって、使い方も的確になる。即ち技能が高まっていく。マネジメント理論はある種の発想法であり、考え方の枠組みを提示する。それなりの年月や議論によって鍛えられてきたものが、マネジメント理論として残っている。今回は、これから経営を担っていく若い人たちを念頭に、マネジメント理論の解説とその実践例を通じて、経営を身近なものとして考え、実践に生かしていただきたいと考えて著書とした。